

戦場に行くな

自衛隊のトルク派兵反対

「殺されるかもしれないし、殺すかもしれない」(小泉首相)といいつつ、政府は9日、陸上自衛隊などにも派遣命令を出し、イラク派兵を本格化しようとしています。しかし、自衛隊派兵は、占領軍の支援のためであり、国際正義からみても、憲法からみても、なんの大義もありません。イラク国民が望んでいるのは、国連中心の人道復興支援であり、武装した自衛隊ではありません。

イラクで人道支援をしてきたNGOの声を聞いてください

「イラクは危険だから自衛隊が行くしかない」と思われているとすれば、大きな錯覚です。イラクで活動してきたNGOは、自衛隊が行っても役に立たず、かえって占領軍と区別しておこなわれてきた人道支援がやりづらくなり、妨害になると警告しています。イラク国民は、占領軍の支援を望んでいません。占領軍の撤退と主権回復、国連主導の復興こそ人道支援の実効ある道です。

野蛮な占領が元凶 国連中心の復興支援こそ必要です

もともと国連も認めない不法な戦争をし、民間人1万人もの犠牲者を出しました。そのうえに、野蛮な占領をつづけています。住民が生活する市街地や部落にも、航空機や戦車からの攻撃もするため、一般市民から犠牲者が続出です。これでは、反米感情が高まるのも、当然です。“フセインもノー、アメリカもノー”、これが、イラク国民の声です。



イラク国民が望んでいるのは、武装した自衛隊員ではありません(イラクに持って行く対戦車弾)

ローマ法王も米批判

「アメリカは国連の承認なしに侵略した。彼らは法の力ではなく、力の法を行使する誘惑に屈服したのだ」(12月16日)

イラク指導者も派兵反対

12月に来日し、小泉首相とも会談したイラク民主化指導者リカービ氏は「あらゆる外国軍の派遣、駐留、占領は受け入れられない。自衛隊派兵にも反対する」と語りました。

--	--